

編集後記

今回、初めて英文の論文を掲載することになった。世界に向けての発信の第一歩を踏み出したといえよう。また、海外に目を向けた最初の論文も掲載されることになった。いずれにしても、我が学会も総合知に相応しく視野を広げつつあると言えよう。

一方、今年の半ばに、ドイツが産官学一体となって進めているインダストリー4.0がわが国で急に話題になった。そして、最近わが国でも、生産性向上へ政策を集中するとして、成長戦略全体像が発表された。そこには、「産業の新陳代謝の促進」、「雇用制度改革・人材力の強化」、「大学改革・イノベーション」、「市場創造」の4項目が挙げられている。残念ながら、これらの項目の裏に、それぞれの所轄官庁の顔が浮かんでくるようで、横断的、統一的な取り組みは感じられない。それでも、「産業の新陳代謝の促進」の中に、IoT、ビッグデータ、人工知能の活用というキーワードは抜け目なく取り込まれている。

筆者も、ごく最近まで、インダストリー4.0に目がくらんで、IoTとビッグデータには、それ相応の関心を持っていたが、人工知能についてはつけたし的にしか注意を払っていなかった。しかし、考えてみると、世の中のあらゆるものにセンサーが取り付けられ、ビッグデータが集められ、人工知能で処理されることになると、世の中は様変わりするのではなからうか。

すでに、小林雅一(2015)¹によると、欧米では「ロボット・ルネッサンス」とでも呼ぶべき開発ブームが巻き起こっており、すでに米国の「ウィロウガラーズ」というベンチャー企業が開発したロボット用の基本ソフト「ROS」(ロボット・オペレーティング・システム)が、一種の「デファクト・スタンダード」として、誰にでも無料で提供されているという。そして、「ウィロウガラーズ」から権利を引き継いで「オープン・ソース・ロボティクス財団(OSRF)がROSの普及・配布活動を行っており、グーグルがOSRFに対して強い影響力を持っているという。

そして、一方、人工知能そのものは、2006年以降に生まれたディープラーニングなどによって、汎用的な知性を備えた「強いAI」を実現できる希望が蘇ってきたという。「強いAI」を持ったロボットが、我々の生活の中に登場してくるのである。また、このままでは、かつての一部の分野だけでなく、全産業の主導権を米国勢に握られてしまうかもしれないという。我々も、総合知を標榜する以上、インダストリー4.0などがもたらす世の中の変化について、何らかの対応を図っていかなければならないのではなからうか。

小松昭英 記

¹ 小林雅一、AIの衝撃－人工知能は人類の敵か、講談社、2015

